

## 寛仁親王殿下



について

# アナトリア考古学

私、門外漢ながらなぜ中近東文化センターアナトリア考古学研究所建設募金委員会に応援をしたかの1番大きな理由は、世界中に遺跡はたくさんあります。そして日本は新参者で英、米、独、仏あたりは150年ないし200年前から世界中の遺跡を本当に掘りつくしてまいりまして、その中で世界史というものを作ってまいりました。我々が中学や高校で習ってきた世界史というのは、すべて欧米が作り上げました。ところが大村隊長は30年来、トルコであるいはエジプトで若いときから掘っているわけですが、掘れば掘るほど学んできた世界史に微調整が必要ではないかと思うようになったそうです。そこでいつの日か自分で掘ってみたいという気持ちを持ち、うまい具合に18年前に中近東文化センターがカマンカレホユックで掘ると決めましたのでその主任研究員兼隊長として現在18年間トルコのアナトリア高原のど真ん中で掘り始めて世界史の再構築をするための調査を

やっています。

なぜアナトリアかですが、大村さん曰く、エジプトの考古学、あるいはシリア、イラン、イラクさらには中国もありますし、南米にもたくさんマヤ文明やインカ帝国いるんなものがあるわけですが、それをおのおのの国の考古学としては大変貴重なことだそうでありまして。しかし、この中近東文化センターのやっているのは、カマンという素晴らしい文明の交差点になるのだそうです。つまり中国からのシルクロードを通ってきた文明も、カマンカレホユック遺跡を通っていますし、ヨーロッパの文明もそこを通り過ぎています。上の方は旧ロシアのほうからあるいは南のほうからはシリアやイラン、イラク全て東西南北の文明が正にアナトリア高原のチャウルカン村というところにありますカマンカレホユック遺跡で十字路のど真ん中を掘っているとご理解いただくとわかりやすいと思います。そこを縦に、刷毛と篩で丹念に少しずつ掘っているわけです。

今現在4500年前のところまで掘っていてさらにその遺跡には8000年の歴史が眠っているといわれていますから、我々が死んだ後も掘り続けなければならぬと思いましたが、いずれにせよカマンカレホユック遺跡では、現在欧米の考古学者が作ってきた世界史が明らかに再調整しなければいけないという証拠が次々に出てきているわけです。その世界史の再構築が1つであります。もう1つはこれも私はスキーだけやっておりましてので勉強はしませんでした、世界史の中で暗黒時代と書いてあることだけはうる覚えに覚えていました。そんなことをその当時は何のことかわからずただ暗記したわけですが、これは3200年前から2750年前の450年間を暗黒時代と呼びます。欧米の考古学者たちは一生懸命調査、研究を数百年やったわけですが、どうしてもその年代だけがよくわからなかった、大変彼らはアバウトですからわからない、だから暗黒時代と命名してしまっ、我々はそれを素直に覚えてきてしまいましたが、大変信じられないことにこのカマンカレホユック遺跡では、11年ほど前に地元の作業員で確か15歳だったと思いましたが、ドゥラックくんという現在はもう大変な偉丈夫となって、カマンになくはならない大変優秀な作業員に成長しましたが、当時彼は粘土本を掘り当てたんですね。そこにはくさび形文字が書いてあって、今それを真剣に解読をしようとしているわけですが、それが出たと言うことはそのちょうど上から

ずっと掘ってきて、2750年前から3200年前の間のところにあったわけですから、それが解明できればそこ人類が何をしゃべって、何をやったかがわかります。さらにその後、次々に彩文土器という紋様のある土器がいくつも出てきたそうなので、ということは当然そこで生活がなされていて、ありがたいことに住居の跡も出てきました。したがって、暗黒時代という誰も解明できなかった部分を我が日本隊が率先して、もちろん現在も17ヶ国以上の外国の考古学者や歴史学者がカマンに集まっては部門別に丁寧に協力をしてくれているわけですが、基本的には中近東文化センターの派遣している大村隊長以下の日本隊を中心とする考古学チームが、この誰もわからなかった暗黒時代の解明を手がかりがつかんでいるわけですから、こんなすごい世界史を変える国際貢献というのは、我々にとっては偉大なことだと思いますしロマンを感じます。先ほど申し上げたように、考古学というのはマイナーな学問で、やっている人は非常に日本の中でも少ないわけです。世界的に見ても日本は新参部隊ですが、その人たちの手によって偉大なる世界史の再構築と暗黒時代の解明がもしできるとしたら、これ以上の国際貢献はないのではないかと、我々門外漢であってもどうしてもこれは応援せざるを得ないというのが正直な気持ちです。これは私が募金会をOKして現在まで一生懸命になって日本国中をかけずり回っている大きな理由ですから、皆様方も考古学者の専門家になっていただきたいなどと間違っても申しませんので、このことだけはぜひとも覚えておいていただければと思います。

私はトルコという国は、世界中200ぐらいの国と地域があると言われていますが、もっとも親日的であると信じて、疑っておりませんので、その話をちょっといたします。随分古い話ですが、明治19年に小松宮両殿下という、現在廃絶になってしまった宮家がありますが、その両殿下が大勲位菊花大綬章をお持ちになって、明治天皇のご命令でトルコに初訪土なさいます。西暦で言いますと1886年です。その時は別になんということとは起こらなかったのですが、無事にお渡しになってお帰りになります。そうすると、その時オスマントルコ帝国時代であります、アブデュルハミト2世という皇帝がいらっしゃいました。そのかた、今度は明治天皇にお返しのお勲章をおあげになるために、ご自分はいらっしゃらないのですが、

エルトゥールル号という軍艦にオスマン・パシャという提督座乗でオスマントルコ帝国の最高勲章が明治天皇のために運ばれて参りました。それが3年後の1889年のことでした。明治21年ですが、無事にオスマン・パシャ提督が明治天皇に勲章をおあげになって、戻るわけですが、台風に遭遇してしまいました。岡山県沖の現在は串本町というところの檜野崎の、今見ますと100mと離れていない近いところに、ものすごいゴツゴツした岩礁地帯があります。そこに運悪くエルトゥールル号は座礁沈没します。そして数百名と言われていた乗組員がほとんど全滅に近い状況になるのですが、檜野崎の漁民が死にもものぐるいになって救出作業をしまして、確か700人ぐらいと言われていますが、その中の69名だけがなんとか生き延びるわけです。

そのニュースはすぐさま明治天皇の耳にも入り、当時の総理大臣の耳にも入りまして、明治の20年後に、全国の募金活動というのはきっと初めてではないのかと思いましたが、全国で募金活動がなされました。そして陛下はご自分の軍艦でありました金剛と比叡という船をお出しになって、その69名を手厚くドルマバフチェ宮殿というところにおもどしになりました。このことが明治22年、1890年のことです。したがってちょうど今から12年前が100周年になりました。トルコはこの檜野崎で69名が数百人の中から日本の漁民によって助けられたということ、そして陛下以下、総理大臣以下全国民あげて自分たちの兵隊さんたちを助けてくれたということにいたく感動しました。それが日土修好の第1年というふうに彼らは考えたわけです。以来現在で112年経ちました。私は12年前にメルシンという軍港での慰霊祭に出席をしました。当時のオサロ大統領の奥様が串本町の慰霊祭に交互に行って、盛大にやったわけです。

今年は112年目になり、来年がトルコ年ということになります。以来ともかくトルコという国は大変親日的、これは基本的には日本もアジアですし、それからアナトリア半島というのもアジアであります。皆様ご承知の今の首都はアンカラというふうになりましたが、オスマントルコ帝国時代まではイスタンブールが首都で、イスタンブールというのはヨーロッパ側にあります。したがって95パーセントの国土がアジアとお考えいただきたいし、トルコ語というのはウラルアルタイ語族という語族に属して、モンゴル語であるとかフィンランド、ハンガ

## 特別講演 (要旨)

リー、朝鮮語等々と一緒に同じ語族なのです。日本語というのは、朝鮮語に似ているようで、トルコの知識人たちはついこの間も熊本県で菓子大博覧会という91年もあった菓子博というのが盛大に開かれています。実行委員会がトルコの遺跡の遺物をたくさんお菓子で作りましたので、トルコ大使館の一等参事官を私、呼んで一緒に見学してきたのですが、そのライフカラジャさんという一等参事官も日本語とトルコ語はウラルアルタイ語族だからという言い方を何気なくしてしまうのです。実際は違いますよということの説明しましたが、確かに似ていることは、似ています。そんなことがありました。

アジアである、語族が似ていたりする、さらに一番大きいのはやはり日露戦争に極東の小国が大国ロシアをやっつけたということが彼らをいたく感激させました。なぜならばトルコという国も数百年、数千年かもしれませんが、国境のすぐそこでロシアとはいろんな戦いをずっと繰り返してきた国であります。したがって、アジアの小国に、“同胞よくやった”とこういのが彼らの言い分なんだろうと思います。したがって日本と同様、昔はトルコにも姓名がなかった時代があったと思います。そしてムスタファ・ケマルという今アタチュルクという建国の父という名前になっていますが、大変有名な将軍が現在のトルコ共和国を作るのですが、それ以降むこうにも、いわゆる近代化になりまして、姓名がつくわけですが、その時に、バルチック艦隊をやっつけた我が方の三笠の総司令官だった東郷平八郎さん、あのお名前を自分のファミリーネームにした人がたくさんいます。むこうにいきますと東郷という姓がたくさんあるんです。父が40年ぐらい前に初訪土したときの外務省の儀典官が東郷さんとおっ

しゃったそうで、父はびっくりいたしました。それから12年前に私が初めて行ったときも、父からそういう話を聞いていましたが、今トルコに行かれますと銀製品と有名なジュータンと革製品がいいと言われておりますが、ある靴屋に入りまして、「このサイズのこの色のいくつか出してきてくれ」といって見たらそこに東郷と書いてありました。その靴屋さんのオーナーは東郷さんだったのだらうと思います。幸いに日本という国に対して、トルコは大変な親日的な国とご理解ください。通常トルコとハンガリーとフィンランドが先ほど申し上げた語族も似ていますし、同じアジア人ですし親日的である、という言い方をします。私はイギリスに留学をした関係で日英協会、それから障害者福祉の関係で日本ノルウェー協会という2つの協会の総裁をしておりますがこの2ヶ国というのはどちらかという外交上どうしてもお付き合いをしなければいけませんから、親善関係を大事という意味で私はやっておりますが、トルコというのはそういったことを度外視しても本当に「おい、お前」という感じの国です。

この間、ワールドカップはトルコが1対0で日本をやっつけました。あの時にみんな私の仲間は日本を応援するのかトルコを応援するのかと、今募金会一生懸命やっている手前みんな心配しましたが私は当然トルコを応援しまして、1対0でよくやったと思いました。それまたトルコという国は素晴らしい国で、ずっと共催国だった韓国が予選を通過してトルコとあたるのですが、また見事に3対2という1点差でトルコは勝ってくれるのです。もし3対1とか、3対0だと韓国のほうが弱かったとか強かったとか、いろんな事をがたがた言われると思いますが、日韓ともに1点差で勝つというすごいことをやってくれました。

いろんなことを申し上げましたが、トルコと日本というのはそういった意味で大変親しい国柄であるということで、なおかつこのカマンカレホユックという遺跡が世界史の再構築と暗黒時代の解明にはもっとも適したところであるというこの大きな部分だけは皆様方、ご理解いただいております。最後になぜ本気になって応援する気になったかの一番の原点ですが、最初に12年前に私が行くときに父親はトルコもカマンカレホユックも考古学も何にも興味を持っていない私に対して、大村さんとその当時のセンターの理事長だった亡くなられましたが森先生という素晴らしい歴史学者がい

らっしゃいます。その2人をうちに派遣されていわば世に言う、御進講をしてくれたわけですが、その時に聞いた話がとても素敵でした。例えば、カマンカレホユックをどうしてその地に決めたかというのは彼は早稲田を卒業した後、アンカラ大学でタフシン・オズギュッチというアナトリア考古学の世界第一の専門家の下で学びました。彼はトルコ語ペラペラで、そのオズギュッチ先生というのは大変素敵な先生で、大変大村さんを本当にかわいがっていられます。そしてプリンス三笠がやろうとしていて自分の愛弟子の大村が掘ろうとしているのだったら自分が掘りたいという場所を譲ると言ってくれたのです。その先生自体今キュルテペというこれまたぜんぜん別に大切な遺跡を50年ご自分で掘っておられます。したがって、父と全く同年の卯年ですから87歳だと思いますが、今でも週に3日は現場に立たれるという大変タフなおじさんですが、彼がもしキュルテペの次に時間的な余裕があったらここが掘ってみたいというところ、それが今のカマンカレホユックです。普通の諸外国の隊だったら、例えばドイツ隊だったらドイツ語でアメリカ隊だったら米英語でというふうにして、作業員をお金でやとって「そこ掘ってちょうだい」というふうにやると思います。

日本は全く隊長以下全員がトルコ語の名人で、土着民よりもうまいと言われております。そういう人たちがいますから、全ての会話がトルコ語でなされている。さらに最初発掘が始まった頃は水が少なかったそうで、延々と山また山を乗り越えて日本隊はパイプラインを敷きました。そのうち隊はそれほど何十人もいるわけではありませんから、3分の2はチャウルカン村の村人のために水を分けて、その3分の1だけが日本隊が使っていたというような話とか、これは彼が後で話すと思いますが、日本隊が一生懸命そこにいて、掘って今偉大な貢献をしそうなのですが、遠い国から来て一生懸命掘って仮に実績をあげても結局そこを正しく継承し、盛り上げていくというのは地元の人たちだというのが隊長さんのご意見で、他の発掘隊ではあり得ないことだと思いますが小さい子ども達、あるいは作業員たちを考古学者にすべく徹底的なレクチャーを繰り返しています。

先ほどお話ししたドゥラックくんという粘土板を発見してくれた人も当時15歳ぐらいのただ何でもない土器洗いか何かしていたはずの少年だったわけで

すが、それが今は20何歳で作業員の中のチーフ格になっているという、どの考古学者よりも偉大な考古学者に今なりつつあるそうです。そういうことは大村隊長の発想として、やはり外から入ってきた外国人が世界遺産を守るのではなくて、地元の人たちがその重要性を理解し、修復保存のために本気で邁進しなければいけないということのために、コツコツと自分たちも掘りながらレクチャーを繰り返してきて、たくさんの奨学金の学生さんたちも出ていますし、作業員そのものに10年選手がたくさん出てきてくれて将来のトルコに素晴らしい考古学者の研究生、学者さんが育ちつつあるわけです。

そういった長い目でみた育成ということまで手がけている発掘隊なんて世界中どこにもありませんから、これも日本隊の素晴らしさだと思います。そのような日本人でないといわれないような温かい発掘の仕方をしています。わずか日給が900円、日本で時給900円というのはあるかもしれませんが、日給が900円というのはまずないと思います。それで5人の家族がまかなえる、大変ある意味では貧しい国です。

日本隊というのは素晴らしくて5ヶ月間しか発掘期間はないのですが、そこに来た作業員たちは残りの期間全部社会保険で生活をまかなえるシステムをとっているのです。このカマンカレホユックの作業員の募集というのは、現在は数十人の募集をするにあたって数百人が応募してくる。それを選ばなければいけないので隊長さんは大変苦労するそうですが、そういったことも地元ということを念頭において、育てることのみならず、その経済の活性化のためにも役に立っている。

いろんな意味で彼らが18年前からやっていることはすごいこと、素敵なお話を聞いていると思っております。それが図らずもこんな金集めをしなければいけないとは思ってはおりませんでした。やっていることは先ほどから申し上げているようにとても立派なことですし、国際貢献になります。そういった意味で皆様方にぜひともいろんな形でご協力をお願いしたいと思います。それでは専門家であります考古学者の大村幸弘主任研究員にパトタッチをいたしますのでよろしくお願いたします。ご静聴ありがとうございました。

